

## I 取組の概要

### 1 津波防災啓発活動について

平成27年、第17回水大賞の名誉総裁秋篠宮殿下お言葉や、平成26年に実施した関西・四国遠征のアンケートの結果、災害の記憶の風化や、津波防災危機意識の高揚を伝えることが重要であるとの意見を頂き、継続して活動を行ってきた。本年度実施の疑似津波実演会は総計15回、その内訳は学校関係が9回、イベント関係が6回であり震災後最も少ない回数となった。しかし、小学校では過去最大の震災前8回に次ぐ7回だった。中学校では0回、高校と大学はそれぞれ1回の合計9回である。今年度は、沿岸部と内陸部の小学校が1校ずつ増加した。



【左】疑似津波体験する八重畑小学校の児童

### 2 南海トラフ地域の模型の製作

昨年度から引き継ぎ、南海トラフ地域の模型を継続して製作している。250,000分の1の模型は、宮崎県日向灘沖から茨城県鹿島灘の約1,000km間で南海トラフ、相模トラフを網羅し、長さ4m15cm×幅1m80cm×高さ18cmである。本年は海底1400mから開始した。加工で100mごとベニヤ板を切断し組み合わせていく。海拔0mから100mの間が作業に長時間要することになった。特に、瀬戸内海、伊勢湾や東京湾が予想以上に水深が浅く切断作業に困難を極め、多くの時間を費やした。陸上部分は、模型上に等高線が鮮明に写らないため時間を要した。

## (II) 取組の成果と課題

### 1 津波防災啓発活動について

①長年の夢であった内陸部での実演会達成  
前年度、以前沿岸部に勤務し、津波についてご理解をお持ちの花巻市立八重畑小学校の校長先生より依頼を受け内陸部での実演会を7月7日実施した。前日実施の実演会にはPTAはじめ、教育関係、学校支援者や地元住民約100名が参加し、その後深夜まで地域防災について話し合いを持ったと聞いた。翌日は近隣の亀ヶ森小学校と合同の実演会で115人の児童が見学した。将来、海岸近くでの生活やレジャーで海と関わりを持つことになれば津波についての知識は必要であると思われる。



【左】八重畑小PTA他 【右】亀ヶ森小学校

### ②山田町立大沢小学校 初の実演会

7月21日大沢小学校で初めての実演会を行った。同地区は東日本大震災では529棟（内全壊435、大規模半壊32棟他）が被害を受けた。住民の大半が漁業を営み、船や漁具を合わせると莫大な損失となった地区である。小学校は高台に建てられている。5・6年生32名が疑似津波体験をした。地域の事情を分かっている児童が多く真剣に見ていたのが印象的だった。クイズの時明るく答えていた。また疑似津波発生装置に興味を持つ児童もいた。

### ③京都教育大学とふっこう支援掛川が来校

8月10日大学院生含む30名が「学ぶ防災」を掲げ田老を見学後、本校を訪問し、疑似津波・本校被災パネル・プレゼンを見学した。

また、8月19日ふっこう支援掛川が来校

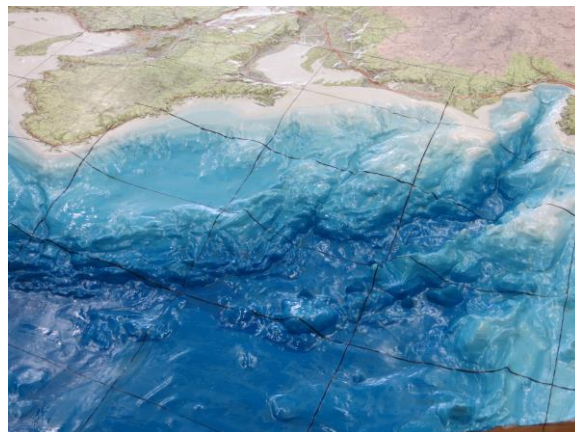
し津波模型疑似津波・本校被災パネル・プレゼンを見学したあと、模型造りを体験した。模型製作を体験する団体は今回初めてであった。パーツを切断、組立を体験し短時間でもの足りなかったように見えた。掛川のスタッフはこの経験を生かして自分たちの地域の模型を作り地域のために活用したいと話していた。

今年度までの実演回数を下記表に表す。

年度	小学校	中学校	高校	大学	イベント				合計	震災前・後
					市内	県内	県外	他		
17年						1			1	60
18年	1				1	3	2		7	
19年	2				3	4	1	1	11	
20年	3	1			3	1		2	10	
21年	5	1			6	1		1	14	
22年	8	2			5	1		1	17	
23年			2				1	1	4	4
24年	5		1	4	2		2	3	17	100
25年	5	2	3		1	1	2	2	16	
26年	5		2		4	1	5	1	18	
27年	5		3	2	4	1		2	17	
28年	6		4	3	1	1	1	1	17	
29年	7		1	1	5			1	15	
合計	52	6	16	10	35	15	14	16	164	164
	84				80				164	

表-1 実演回数

販売業者に問い合わせをし、細線が写るようお願いしたが、改善できず現状のままのものを使用することになった。印刷して見えないところは、濃く少し太めに手書きをした。この作業は細かい作業で根気がいるので、今後注意をして進めたい。



### 3 今後の取組

- ① 前年度から制作中の模型を引き継ぎ、南海トラフ地域の模型を製作している。作業は海拔-1400mから行き、地上200mまで終了した。海面下は、特に-100m～海拔0m間が特に作業に困難をもたらせた。その間には図面上-60mと-20mの等深線が有り遠浅海岸や大きな湾、例えば東京湾や伊勢湾や瀬戸内海に地図に沿って深さを決めなければならなかった。素材2,5mmのベニヤ板を使用、-20mの時は、0.5mmの削り-60mの時は1.5mmの切りしろを与え、深さの調整を行い区別した。ペンキを塗った後、目では見えないが手で触ると分かるよう工夫している。
- ② 海拔0mを境に、図面が変わる。地上部分は国土地理院発行を使用。4枚の地図（関東甲信越・中部近畿・中国四国・九州）を使い印刷によっては等高線の写りの弱いものがあり、作業に支障をきたした。地図の